

『綺麗に何もない畦道』

故郷へ数日だけ帰省する

便の悪い電車の窓に映るは

綺麗に何もない畦道

見渡す限りの田んぼ

ほっとするのは、なぜだろう

酷く疲れが溜まっているだけなのかもしれない

横並びする杉の木が

それまでの自分のように見えてきて

寂しくなった

離れていても、線路はつながっている

そんな簡単なことすら

忘れてしまったように思えたから

ふと、目を閉じて

畦道の向こうからくるのは誰だろう

すれ違うことはできない狭さだったが

その人は私をすり抜けた

誰に選ばれたわけでもない道なき道を

考えずにまっすぐ走ったり

不貞腐れて曲がったりしながら

少しずつ、少しずつ前に進んでいく

これは私自身が選び取った道だった

濁る汗をぬぐい

遠くに見える

綿飴雲はいつまでも大きい

靄は晴れてきて、目を開ける

終点

東端の暗がり

誰もいない電車で揺られる体

明日、私はきっと朝一番に畦道を歩く

綺麗に何もない畦道を

それからなぜかまた、ほっとするのだと思う

綺麗に何もない畦道

2025 年 12 月 30 日 執筆

著 者 やさかれい
八坂 零

掲 載 芸術の星座
